

SSKO

ハイランドレポート
(高原通信)

Highland report !?

D.A.R.C 那須アディクションケアセンター
ニュースレター 第29号(2005, 8, 5)

プログラムに救われた一入寮後の体験

那須アディクションケアセンター
施設長 栗坪 千明

1997年7月7日、私は茨城ダルクの門を叩いた。と言っても自分から進んでというわけではなく、父から「覚せい剤をやめたいのなら、これから行くところで治療をし。それ以外は知らん。」と引導を渡され、病院から直接、父、おじ、おばに連れられてやってきたのである。行きの車中で考えたのは、施設と言うからには病院のようなものを想像していたのだが、着いてみると小さな軒家で、しかも30人近くの良い若い者が上半身裸でゴロゴロしている。病院の安定剤が効いていて、なんだか状況が飲み込めないまま、名前、住所、入寮理由などを書き込む程度の入寮手続きをすませている間に、父親たちは帰っていった。あれから7年がたった。その間ダルクのおかげで本当に普通に生きていたらできないようなすばらしい体験までさせてもらった。それは現在も続いている。

茨城ダルクは田んぼに囲まれた場所にあった。私の実家の幼いころの雰囲気にとことなく似ていて、なんとも言えない安堵感があつた。その安堵感は薬物使用やそれにまつわる今までの社会生活からの解放感も混じって、1週間もすると私は施設生活になじんだ。温泉に行ったり、仲間とマラソンしたりということは、解毒の作用もさることながら、今までクスリのおかげで経験してこなかった何かを私に与えてくれた。

もっとも、良いことばかりではなかった。今までクスリの力を借りながら、なんとか社会の中で成功しようとあがき続けていた私にとって、日がな一日施設でゴロゴロしている生活は、とても苦痛だった。「一日も早く治って社会復帰を果たしたい。」と、焦っていた。その焦りからか、施設を出て行き、クスリを使って戻ってくる仲間を見ると「なんでやめるための施設に来ているのに使うんだ。」と腹が立って、仲間ともめごとを起こしたりした。今となって思えば、それはクスリの欲求だった。「毎日、俺はつらい思いをして止めているのに、なんてうらやしいんだ。」という気持ちだが、屈折して怒りとなって現れる。そんな繰り返しだった。

2ヶ月たったころ仙台の施設に移動になった。仙台では割と自由に過ごすことができた。施設の車を貸してもらい、仲間と一緒に青葉城址に行き、展望台から仙台の町を眺めた。クスリが抜けてきたのか、景色がとても鮮やかに見えて感動した。

落ち着いて景色を眺めるなんていうことは、今までしたことのないことだった。こうして少しずつクスリを使わないことの楽しさを味わっていった。そのこととは裏

腹にあせりがいつもあった。「こんなところでグズグズしていたら社会に出られなくなる。」といつも思っていた。しかしどういう風に社会に出て働いたらよいのという具体的な考えはまるで無かった。クスリを使っていない期間が7ヶ月を過ぎたころ、施設の中でさまざまな問題が起り、自分自身も施設のスタッフが信じられなくなり、「もう施設を出よう。」と思い始めたころ。茨城ダルクから施設長の岩井さんがやって来た。ちょうど良いと思い、岩井さんに言った「もう社会に出ようと思います。」しかし帰ってきた言葉は予想と違っていた。「茨城で法人化を進めている。その仕事を手伝って見ないか。」だった。なんだか良くは解らなかったが、意地で施設を出たいと言いながらも社会復帰をどのようにしたら良いのか不安で仕方の無かった私にとって、それは渡りに船だった。早速茨城に移り、研修スタッフとなり、法人化の手伝いを始めた。

この仕事は、精神年齢の低い私にとって大人になるチャンスを与えてくれた。なぜその仕事を私に手伝わせようと岩井さんが思ったのかは今だに良くわからないが、私にとってはとてもありがたいことだった。その仕事に私はのめりこんでいった。しかし、一度目は努力したにも関わらず法人の認可は下りなかった。このときが私にとってクスリの再使用の最大の危機だった。世間一般の考え方では“大したこと”ではないのかも知れないが、私としては「クスリをやめて一生懸命やったのに、やっぱりやめても俺は駄目なのか。」と自己否定感でいっぱいになった。何かもうこの施設にいる理由がなくなってしまうように思えた。それを救ってくれたのは、いつもNAミーティングで会場を使わせていただいているカトリック教会の神父様だった。神父様は「神様は超えられない試練はおあたえられない、今回できなかったのは、あなたの努力が足りなかったのではなく、まだ必要な時期ではなかったのだ。」と、そのことを聞いて、自分は法人化と言う仕事にクスリから依存の対象を変えただけなのだ気づき、とても楽になった。そしてNAミーティングにでも、依存症にまつわる今まで話せなかった自分の問題を話すようになった。

それからは、原点である入寮者の回復の手助けをするという施設の通常の業務を手伝うようになった。2002年、私にとっての2度目の法人化はプログラムをしていたせいかととても楽にこなすことができた。しかし法人認可は通ったものの建物が建てられないという苦い結果に終わった。皮肉なものだが、そのおかげで、今この那須という土地を与えられた。2003年2月に仮で黒磯に開設、同年11月からは現在の施設で活動を始めた。なかなか思うようにいなくて、もう辞めようとか何度も思った。その都度プログラムと仲間に救われてきた。

私が施設に入寮してから今まで、仲間以外にも本当にたくさんの人たちに救われてきた。その人たちに深く感謝している。

感謝

回復と成長？

薬物依存の1カです。俺が最初にハマった薬物はシンナーです。俺は小さい頃から身体が弱く喘息もちでした。その為、小学1年から3年まで施設にあずけられ、その中で俺は3年間イジメを受けていました。その事が親に言えず、月1回の面会日には何時も自分の感情を隠して楽しく過ごしているように子供ながら頑張っていました。徐々に兄弟の中で俺だけ身体が弱いから邪魔なんだとか、そのうち捨てられるのではないかと思ひ始め、親を恨むようになりました。

依存症のユタカ



それからというものイジメられる側からイジメる側にまわりグレはじめました。万引きをはじめ、中2からシンナーを吸い始め、幻覚という世界にのめり込み現実逃避をしつづけました。中学を卒業してからは、シンナーは止まり専門学校に入学しましたが、数ヶ月で退学になり水商売の世界に入りました。最初は、その時勤めていた店の先輩にマリファナや市販薬のブロンを教してもらいました。アルコールと一緒に市販薬を飲んでポーッとした事もありました。ただ、その頃には客の女性に覚醒剤を打ってもらっていたので、結局は覚醒剤にハマりました。でも今みたいに簡単に買えなく、その女性と別れてからは出来なくなり、薬欲しさに水商売を転々とし、そこで知り合ったヤクザと仲良くなり、毎日薬が手に入るようになり毎日、打ちつづけました。

18の時に1つ年上の女と結婚しましたが、もうその頃には薬が無いとなにも出来ない状態になってしまい、会社に借金をしたり妻の貯金通帳やクレジットカードを勝手に使い、覚醒剤を買いつづけました。どうしても止められなくて、子供が出来たら止めようと思っても止められず、そのうちひったくりや強盗、万引きをして現金を作り薬を使いました。薬の為なら、どんな悪い事でも平気な人間になってしまい、妻と離婚しました。

そして俺は仕事も家庭も薬が原因で失い公園のベンチで寝たりしました。

最初のどん底です。ちょうどその頃に窃盗の罪で捕まり執行猶予で社会に出れました。それからは、真面目に昼間の仕事につき始めましたが、そこでまた薬に手を出ししまい捕まりました。



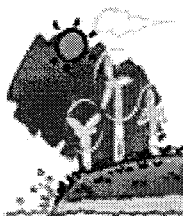
今度は刑務所です。その中で知り合ったヤクザと仲良くなり、出所してからその親分との盃をもらい俺はヤクザになりました。そこでは、色々なシノギを与えられましたが、頭が良くないため、俺は薬の売人になりました。でももとが薬中の為、商品の薬を手に出してしまい、ヤクザもクビになってしまいました。その頃また 捕まり、2回目の懲役です。2回目となると慣れてしまい出所したら、今度は上手く薬

を使おうってことしか考えていませんでした。面会に来る母親に薬には手を出さないとか言っていたんですが、本当は止める気は無かったです。その後、母親が横浜ダルクの家族会につながり、ダルクに入らなければ、迎えにいかないと抜かしはじめ、仕方なしにダルクに行くから迎えに来てくれと頼みました。

平成16年8月16日に出所して、そのまま横浜ダルクに入寮しました。最初は母親を恨み、こんな所では薬なんて止まるはずなんてないし、回復なんて絶対に無理だと思っていました。ミーティングでも仲間の話をけなしたり馬鹿にしていたんですが、そのうち仲間の話を聞けるようになり9月に那須の施設に移りました。最初の頃は、慣れない環境に戸惑い凄く嫌でした。周りは山ばかりで、いるのは牛だけ。コンビニなんて、歩いては行けない距離。車で30分以上は楽にかかるすげー場所。とてもじゃないけど、神奈川県生まれの俺には、考えられない所。早く出て行く事しか考えていませんでした。施設のプログラムもなかなかやる気になれず、みんながソフトバレーをしても何時もくだらない、馬鹿馬鹿しい、薬を止める為に来ているのに何の意味があるのかと、ふてっけだし、ミーティングも嫌でした。

なんでわざわざ他人に自分の過去の話や、欠点、弱みを話さなければいけないのか、俺にはまったく理解ができませんでした。一生懸命話す仲間を馬鹿にしたりけなしていました。それはまだ、自分が薬物依存症と言う病気だと認めてなく、認めるのが怖かったのです。だから苦しんでいる仲間や自分の欠点を話す人達をけなしていたんだと思います。何時も俺は回りの仲間たちを威嚇していたし、自分の思いどりにいかないとくっかかり、不満ばかり言うてました。でも嫌々ながらもミーティングを聞いていくうちに、俺と似たような過去を話す仲間や、こういう考え方をするとラクに行けるのかと、だんだんと仲間の話もきけるようになり、俺も話が出来ようになり、少しずつ俺も仲間たちと一緒にクリーンをつづけて行こうって思えるようになりました。

それからはミーティングでも自分の話をするようになり、プログラムも参加するようになりました。そういう気持ちになれたのも、回りの仲間たちが根気よく面倒を見てくれたおかげで、どうにか11ヶ月のクリーンを保ちつづけています。ここは回り全てが山林に囲まれていて、すごく良い環境です？社会と離れ先取り不安もあるが、自分自身を見つめ直す場所としては最高かも・・・日々、仲間たちと生活し共に頑張り自分自身の病気と戦い、どうにかクリーンを保っています。スゲーことです。何をしても薬を止める事が出来なかったのに。まだまだ、正直になれない自分だけど、これからも仲間たちと共に良い回復をつづけて行きたいです。仲間たちに感謝です。



8月予定表

- 1日 三重フォーラム
- 2日 三重刑務所面会
- 4日 栃木県薬物依存フォーラム
- 6日 つくば家族会
- 10日 新聞取材
- 14日 大田原教会バーベキュー
- 19日 裁判
- 25日 宇都宮観察所講演
- 28日 那須ケアセンターを支援する家族会

残暑お見舞い申し上げます。

皆様におかれましてはお変わりありませんか？
日頃より那須ケアセンターをご支援いただき有り難うございます。ここ那須でも昼間は猛暑が続いていますが、（朝晩はけっこう涼しいのですが）さすがは薬中、みんな元気になっています。

今後も暑さなどには負けず生活していきたいと思っています。これからも、ご支援ご協力をお願いいたします。

編集人 長谷川

編集

D.A.R.C 那須アクションケアセンター

〒329-3225 栃木県那須郡那須町豊原丙 3227 番地 2

TEL 0287-77-7157 FAX 77-7158

Eメール

n-cc@mte.biglobe.ne.jp

ホームページアドレス <http://www5f.biglobe.ne.jp/~NACC/>



秋田 太平山でキャンプ

7月、献金を戴いた方々

中込信子様、大藤礼子様、那須ケアセンターを支援する家族会様
赤羽利春様、西尾雅樹様、笠原利明様、腰高昭秀様、高橋美紀様
山口武様、柴田幸作様、飯島博様 匿名1名様

献品を戴いた方々

坂本幸代様、那須ケアセンターを支援する家族会様、森裕様
鳩巢会様、カトリック白河教会様、永田蓉子様
湯津上村商工会青年部様、山口絵美様

献金のお願い

この時期、施設では通常のプログラムから離れて海や山へと環境を変えてのイベントなどに参加しています。これはメンバー達にとってとても必要な事です。

しかし運営費も出て行くのが実状です。何かと物入りな時期ですが皆様のご支援をお願いいたします。

発行所

郵便番号一五七一〇〇七三
東京都世田谷区砧六一二六―二一
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価100円